

日本の!

地域問題から

始まる

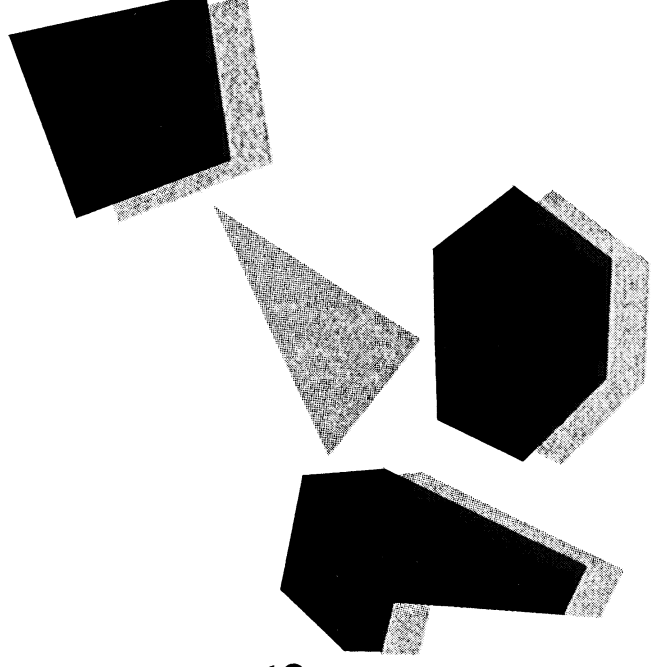
国際化

—• WORLD STUDIES

沖縄・アイヌ/日本の「地域問題」と開発教育
地域に根差した教育活動と開発教育との連携を探る

開発教育を全国的に展開するために

4



第4章 日本の地域問題から始まる国際化 目次

1. 編集者より	1
2. 沖縄と北海道を結ぶ接点	3
3. あるアイヌの主張	8
4. 北緯45° 最北端は最先端	10
5. 二風谷に生みづくユカラ	12
6. 豊かな自然、豊かな心	14

編集者

編集・企画 幸田 雅夫 太田 弘

1. 太田 弘 (慶義塾ニューヨーク学院教諭)
2. 幸田 雅夫 (玉川聖学院教諭)
3. 菅野 志郎 (二風谷アイヌ語こども塾)
4. 水野 隆夫 (環境庁自然保護局利尻礼文国立公園管理官)
5. 武田 尚子 (東京都立府中高等学校教諭)
6. 小沼 英子 (豊島岡女子学園)

1. 編集者より

従来、「開発教育」は開発途上国、南北問題に関する「南」の地域の様々な低開発の状況についてその原因を究明する過程で、私たち「北」の人間の生き方を問い直すものとして位置付けられて来たと思う。言うなれば、「開発教育」は途上国の低開発を対象にした国際教育という認識があったように思われる。しかし、途上国を学習することによって、何を我々は学ぶかということを問い直すならば…、それは経済や社会、文化など様々な面において、理想的な人間の生き方を求め、地域に住む人々ひとりひとりが望ましい生活をどのように作っていくか？ というまさに「地域」に生き人間の生き様を問い、「開発」のあり様を考える学習に他ならない。それは、決してわが国が途上国に対して行う開発援助や協力の中に見られる「開発」に対する考え方だけではなく、むしろ日本の国内における「開発」の問題と多くの共通性を持っているものと思われる。言い換えれば、日本の国内における「地域開発」のあり様が途上国援助・協力における「開発」の思想のバック・ボーンとなっているものと考えられる。

今、日本の対外援助が批判される背景には、国内の地域開発に対する歪みも自ずとあるは

ずであると感じるからで、ひとつの「開発」に関する考え方で内外のさまざまな問題を眺めるならば、いままで目に入らなかった「開発」に絡んだ事実が浮かび上がって来る。

ここには、「開発教育」の今後の学習領域の拡大と「開発教育」がめざす学習の目的をさらに柔軟なものにするために、敢えて国内に見られる「開発」の問題、地域における「開発」の思想とそれに関連した地域にねざした社会的課題の発掘と解明に向けた努力をもう一度、「開発教育」の視点から検討をしてみよう。沖縄は広島、長崎と共に日本の平和を祈念する歴史的な学習の場であると同時に、日本が過去に行った琉球文化に対する侵略行為への反省を促し、現在においても経済的、社会的な言わば国内の「南北問題」の「南」の地域である視点から「開発教育」との関連を考えた。また、北海道では、わが国土の貴重な文化を担う少数民族であるアイヌのことに注目し、歴史的に見ても先住民であるアイヌの土地が「日本」に一方的に取り上げられ、また言語など文化までも奪い取った事実を「開発教育」の視点から洗い直し、国内の様々な差別や偏見との類似性を見つけた。これら、沖縄と北海道は、言わば「思い

上がった強者の論理」で「開発」を進めてきた「やまと＝日本」の犠牲者である。この日本列島の最南、北端の地に長い間に「日本」がとった行為がいかに「開発教育」的でないかは明らかである。その反省に立たずして、どうして途上国の開発に手を差し延べることができるだろうか？ その点からも、私たちは「開発教育」と日本の国内問題との関連性を問いつける必要がある。

先日、イギリスがなぜ「開発教育」を熱心に進めてきたかという問題を議論する中で、興味深い事実を知った。イギリスが「開発教育」、つまり途上国理解に関心を持ったのはひとえに国内における途上国から移民者、特にマイノリティー（少数民族、移民者など）の増加であるという。つまり、国内問題として立場の弱いマイノリティーの社会的権利を守り、差別や偏見をイギリスの一般市民から拭い去ることを目指して、主に労働党が中心になって、「国際理解」を進めた経緯がある。このことを考えると、「開発教育」は単なる援助・協力のための教育ではなく、我々の生活の中に見られる様々な偏った価値、特に人間に対する差別を問題視し、解決することを目指した学習であると考ええることができる。

今回は2つの地域、事例に限ったが他にも、瀬戸内海の汚染や四国への連絡橋の騒音公害と地域住民の生活、さらに水俣における公害病、水俣病の今日における社会問題なども皆、根を同じくする問題であると考えられる。

ひとつの事例を通して、ひとつの事実に到達し、歴史的にも現代問題としても社会の持つ真実に一旦触れることが出来るなら、必ずや社会の歪んだ側面や正義の失われた世界に対して疑惑を持ち、あるべき姿を模索する姿勢を持つはずである。本来の「開発教育」のめざす姿はここにあるはずである。

(木田 弘)

2. 沖縄と北海道を結ぶ接点

沖縄、北海道ともに日本列島の中では両極である。私が住んでいる東京からでも遠い所という先入観があるが、羽田から飛行機で1、2時間である。海外旅行のように、やれパスポートだ、出入国カードなどど面倒臭い手続きは必要なく気軽にに行ける場所である。

私たちにとって、このふたつの地域は遠い存在ではなく、むしろ身近な問題を抱えている地域である。どちらも古くから文化交流が盛んな地域であって、最近になって「国際化」が叫ばれている日本の中では最も国際化が進んだ地域といえる。現在まだ問題が解決できていない大きな問題として、沖縄でいえば、基地の問題、北海道でいえば、北方領土の問題があるが、この地域にある問題はこれだけではない。

暮れの那覇空港は帰省客で混雑していた。その混雑ぶりを放送局が撮影していた。迎えに来て下さった木下義宣先生（美里工業高校）に「南武戦線」の跡地である「姫ゆりの塔」、「摩武仁の丘」を案内していただいた。沖縄戦は、われわれ日本人にとっては思い出しにくい歴史的事実だが、事実が事実として伝えなくてはいけない貴重な場所だ。

1609年に薩摩の島津氏は、約3千の兵力を

もって琉球王国を征服した。平和外交をしてきた琉球であったが、この時期から、薩摩藩を通して近世の日本の幕藩体制に組み込まれることになった。形式的には琉球王国を存続させ、中国（清）との友好関係を維持させた。1889年日本領土であることをはっきりさせるために、沖縄県を設置した。

第2次世界大戦末期には、日本から見れば「本土防衛の防波堤」として、沖縄は、国内で唯一の地上戦の場となり、尊い命が多数奪いさられた。戦後アメリカの下に置かれ、1972年に本土に復帰をしたのである。沖縄県民の願いかすれば、「本土なみ」に米軍基地を撤去して、縮小することを願っていたのであるが、現実には、基地の土地の20%は米軍用地となっている。南部戦線跡地では「沖縄師範健児の塔」などの碑が建設されていたが、若い命が失われていったことに対して、心が痛んだ。「摩武仁の丘」の下には平和祈念資料館がある。「南部戦線跡観光」と銘うった観光バスは、なぜかこの資料館を案内しないそうだ。貴重な資料があるのだが、古い建築物のわりに客が少ないのはどういうことだろうか。

沖縄は「平和教育」が大変さかんな地域で、

本土にいるよりも学ぶことができる。平和教育の先進的な役割を果たしているところとして、沖縄県教育資料センター(※1)があり、平和教育の資料に関してはここで購入することができ。木下義宣先生はここでも活動をされていくひとりである。人からの紹介で、平和教育に夫婦で関心をもたれている伊礼巳知男・洋代先生（那覇商業高校・具志川商業高校）のお宅を年末の忙しい時期に訪ねることができた。年末の大掃除を中断してまでお話をしてくださった。「時間があたら是非、伊江島の阿波根昌鴻先生に会われたほうが」というお薦めもあり伊江島へ向かった。

途中、読谷村の「チビチリガマ」を見学した。沖縄戦が始まったときに、住人が避難し、米軍上陸の翌日（1945年4月2日）悲劇的な、集団自決が起きたところとして知られている。「チビチリガマ」はさとうきび畑の中にあり、あまり目立ったところになかった。むしろ、近くにある通称「象のおり」（在日米軍のアシテナ）の方がよほど目立った存在であった。「チビチリガマ」入り口には、「世代を結ぶ平和の像」があるが、これは壊されたままであった。歴史的事実に対して反対をしている人たちもいるのである。

石川市を經由して、県道104号線を通過して、恩納村へと行った。キャンブ・ハンセンという米軍基地があるが、県道104号線は、その真ん中を横断している。県道の途中に“G・P”という看板がいくつもあった。その下には数字が書いてあり、これが何を意味したものなのかは、理解することができなかつた。フェンスのそばには「許可なく立ち入ったときは日本国の法令により処罰されます」とでていた。日米安保条約が続く限り、この標識はとり除かれることがないのであろう。恩納岳がそびえた真下であるが、演習の度に県道が閉鎖されるという。本土でこんなところはあるだろうか。

沖縄本島の北部に「オクマ」と呼ばれている地域がある。ある航空会社のバック旅行で有名になった。この付近は、本来は国定公園であったが、ここだけは例外的に国定公園の指定地域から解除されている所である。元は米軍のプライベートビーチであったらしい。設備の整った素晴らしい所で、まるで外国のリゾートの感覚である。シーズンオフとはいえ、ビーチに面したプールの水は温水であった。レジャー施設もプールだけでなく、若者、家族連れをはじめ、多くの人のニーズをつか

んでいる。このような、平和な時間を過ごすことができる地域も沖縄なのであるが、それは、隔離された世界で、作られた平和がそこにある。「基地」の問題などすっかり忘れてしまう楽園である。

伊江島の阿波根昌鴻氏と連絡がつき、突然であったが、伺わせていただいた。訪問する前に伊江島で一番高い城山に昇って、伊江島の全貌を見た。滑走路2本がはっきり見えた。本当は3本あり、2本は旧陸軍のもので、1本は沖縄の海洋博の時に皇太子（現天皇）のために作ったそうである。第2次世界大戦の時、伊江島も多数の犠牲者、集団自決者を出した、島である。戦争が終わって、強制的に、米軍の基地とされ、土地を接収されてしまっただけである。本土復帰を願い、結果としては日本に返還されたもの、この島にも「平和」という言葉はまだ訪れていない。

阿波根昌鴻氏は80才を超えた高齢の方であったが、反戦平和資料館「ヌチドゥタカラの家」（命こそ宝の家）で約2時間ではあったが、お話を聞くことができた。反戦地主として活動をしているが、そのことについては、『農民と基地』（岩波新書）（※2）の中に述べている。阿波根昌鴻氏をはじめとする、反戦

地主の活動により、米軍基地となっていたところが徐々に縮小されたそうである。だが、基地は島の面積の3割である。島民は、復帰前は平和運動を積極的に行動していたが、復帰後は、「基地は金を儲けるもの」という考え方が広がり、反戦地主が減ってきた。基地に貸した軍用地のあがりでも立派な家に建て替えた軍用地主の数が増えている。基地に自分の土地を貸して生活をしている人が増えていく中で、阿波根氏は「資料館」まで自宅に作り活動を続けていたのである。それは、相手の人格に対して傷をつけることなく、人類全体の平和を考えているからである。阿波根氏が「日本人は、沖縄については見えていない。フィリピン、アメリカは見えていても、沖縄のされてきたことすらわかっていない」と嘆いておられたが、当たってもそれで先進国とはいえない額がいくらく多くてもそれで先進国とはいえない。「途上国を救う以前に、まず自分の国を救わなくてははいけない」と語られた。第1に「心」の勉強が必要で、それは先人を学ぶことにより学べるものである。先人の道を歩んだ人が幸せになることができるとのこと、学ぶことの大切さを説いた。耳は遠くなく、いたが、その情熱と実践の素晴らしさは、こ

の紙面だけでは表現できないのが残念だ。読んだだけではわからない。

本当に2時間あまりは、あっという間に過ぎてしまい、お別れするのが惜しかった。リゾートへ行くことはあっても、伊江島へ行くようなことは少ないと思う。沖縄に来るまで恥ずかしい話であるが、阿波根氏の著作や活動を理解して訪問をした人間ではなかったが、沖縄の縮小版をこの小さな島で学ぶことができた。軍用地の租借料で人間が変わってしまい、反戦地主の数が減っていつの間にかここを阿波根氏は嘆いておられたが、人間金で人格が変わってしまうことを目の前で見ただよな気がした。

より良い生活を、より楽しい生活を、となればそれだけ金がかかると。経済が優先か、それとも人間の生きる権利が優先かの問題になってくる。「開発」をすべるとなると、どこかに必ず利潤が生まれ、得をするものが生まれる。同時に、損をする人もいる。人だけではない。沖縄県は夏には水不足の問題がしばしば取り上げられている。各家庭には水タンクが設置されている。ホテルが建設されれば、大量の水が必要となる。その水を確保するために、山が削られダムが作られ、自然破

壊が行なわれている。犠牲者は、人だけでなく自然界も犠牲になっている。

レジャー開発が行なわれ、海も自然な海から人工の海へと変わってしまっただけ。素晴らしいホテルが建設され、そこで数々のレジャーを楽しむことができる。しかし、ホテルやレジャー施設の中には本土資本のものが多くあり、利潤は結局本土の方へもっていかれてしまっている。レジャー施設で働く人は、沖縄出身者がほとんどだが、これでは、フィリピンの「バナナ農園」と同じ構造である。

北海道の、レジャー開発もこのところたいへんな人気である。6年ぐらいい前に人口1500人ぐらいいかいなかったスキリゾートに5万人収容できる施設が誕生した。もともとはこの地は、アイヌの地であった。「トマム」という名前の地で、アイヌ語では「偉大なる荒野」を意味するところであった。今は、人間の知恵と技術と金で、その荒野はすっかり変わってしまった。冬のスキリゾートだけでなく、夏のバカンスも楽しむことができる、オールシーズンでの施設となっている。スキー、ゴルフ、テニス、だけではなく音楽、美術などのカルチャーの要素も含まれつつある。ハード面だけでなくソフト面においても充実し

つつあるそうだ。国の総合保養整備法（リゾート法）に基づいた開発計画が全国各地で進められているが、その構想のひとつにはいつている。

ゴルフ場に関しては、ゴルフ場の建設が、このところ規制の解除で続々と工事がされている。保安林も伐採されて、自然破壊が問題となっている。大手企業の資本により、開発は進められている。日本の国土の2割がリゾート計画で、ゴルフ場その他で占有されることになりかねない状況にある。貴重な自然が破壊の危機になっている。また、スキージャンプも同じようなことが言われている。森林が減ることにより、雪崩が多発したり、土壌の流出が起きている。飲料水にも影響を与えている。飲料水のなかに不純物が混ざっている。開発が大切なのか、自然を保護するかという問題は、リゾート法、環境アセスメントなどともにもますます激化していくものと思われる。

北海道は、先住民であるアイヌによる地名の地名がある。空港がある千歳市は、「シ・コツ」といわれたがこれは「凹んでいるところ」という意味である。広尾は、「ピロロ」という言葉からきていて、これは「崖のある

ところ」のことである。帯広は「オ・ペレ・ペレケブ」で「川が幾つにも分かれている川」を意味する。今でも、北海道には45,000ものアイヌの地名が残っている。

北海道千歳市から車で約1時間位の所にある平取町(びりり)の、二風谷の萱野茂氏、志朗氏の所を訪問することができ、アイヌの神の話などを聞くことができた。「アイヌ文化資料館」(※3)には、萱野氏が苦勞をして集められた、貴重なアイヌの民具が展示されている。アイヌの「イオマンテ」(熊祭り)の様式のものなども置いてあった。萱野氏が働いて稼いだお金でこれらのものを買集めたという苦勞話を聞いた。「今集めなければ」というその人類の遺産を大切にしようというその心に感動をした。人間が作ったものには、心がこもって同じものを作ることはい

アイヌでは、死の神々は天上界では人間と同じ姿をし、人間と同じような生活を営んでおり、人間の世界に遊びに行く時には、自然界の姿に変えて地上へ下りてくると信じられている。偶像崇拜ではなく自然崇拜である。川、山、立ち木、フクロウなども神なのである。北国の厳しい自然のなかで、狩猟採集生

活を営んでいたアイヌの人々は、その生活基盤である自然を神として崇めていた。自然と共に生きてきたのである。たとえばサケを取るにしても、9、10月は産卵のときなので、その日に食べる分しか取らず、11月になってから産卵が終わったものを食べたとそうである。サケの数が減らないように考えて取っていたのである。生態系が壊れていくことを知っていて、自然との調和を大切にしていた。たとえば、アキアジ(サケ)とりについても、これは狐の分だから河原へ、これはカラスの分だから屋根の上へとしたそうである。

このアイヌの聖なる川となっている「沙流川」にダムが建設され問題となっている。二風谷ダムは、道開発局の沙流川総合開発事業のひとつとして、昭和59年より土地の買収が始まった。この多目的ダムが建設されれば、二風谷が水没する。ダムの目的は、洪水調整、水道用水、灌漑用水、苫小牧東部工業基地への工業用水、発電などである。所有地は差別の色が強い「北海道旧土人保護法」(明治32年制定)に基づきアイヌへの供与地である。官吏や、開拓農民に分けた残りの荒地や原野をアイヌに供与したにすぎない。その土地もアイヌが現在持っているのはほんの僅かばか

りである。その土地を現在強制収容しようとしている。アキアジの捕獲権を主張しているが、聞き入れてもらえない。残り少なくなっているアイヌの財産権を金銭の補償で終わらせようとしている。アイヌ地権者は訴えているが、先住権を認めていないのが現状なのである。また、生活保護率は高く、高校進学率は平均に比べると低い。奨学金についても特別措置があるわけではない。

人類にとっても、言葉というのは物凄く大切なものである。現在日本について言えば、標準語で教育をされ、どこへ行っても会話に不自由することがない。それが当たり前だと思っている人は少なくない。教育において、標準語を普及させていることは、大変良い点もあるが、反面地域性を失わせてはいただろうか。地域の大切な文化を、標準化している。「明治以降同化政策という美名の下にまず国土を奪い、文化を破壊し、言語を剝奪している。土地を取り上げるなら、せめてサケの捕獲を」という萱野氏の訴えはどこまで国に届くであろうか。民族が、民族として存続していくためには、文化の存続を認めなければならぬ。1992年の参議院選挙に候補者として健闘したが惜しくもなれなかった。世論とし

ては初のアイヌ出身の議員として注目されていた。

二風谷では、アイヌ語教室が開かれている。萱野茂氏をはじめアイヌ語を理解する方が講師となって、大人の講座、子供の講座を開設している。茂氏の息子さんの志明氏は、運営事務、講義録などを担当されている。大学を卒業してから、民間企業に勤められ、アイヌ文化の保存を考え故郷である二風谷に戻られ活動をされている。'89年のアイヌ文化祭にてアイヌ語にて「アイヌ青年が自らを語る」というタイトルで講演をされたそうである。アイヌ語の保存を訴え、教育現場においても「アイヌ語」学ぶチャンスをつけてほしいことを訴えておられた。なお、日本の大学で、アイヌ語の講座を持っているところはものすごく少ないそうである。平取では500人のなかで300人がアイヌであるという素晴らしい環境にある。この環境を壊すとすると、問題が多いのではなかろうか。アイヌ語教室のテキストを見せていただいたが、アイヌ語がカタカナで書かれている。お年寄りのアイヌの方でも、アイヌの言葉がしゃべれない方もいるので、だれでも学ぶことができる教材を求めて、カタカナ表示でされたそうである。

言葉は、長い間の人間の生活習慣から生まれてきたものである。人間の生活、思想が身についた最も身近なものである。日本の同化政策により、アイヌ語を何不自由なしに語れる方は数少なくなっている。

文化を守り、自然を守るとは、生きていく人間の使命である。この地球の経済が発達すれば発達するほど、地球の「いのち」は短くなっていく。エネルギー、食料、廃棄物の問題などあげれば数限りなくある。今回は、沖縄、北海道と訪問するチャンスをもてたが、離れたふたつの地域であるが、共通してもっている問題がかなりあることを発見した。日本の地方での問題ではない。途上国も同じような問題を抱えている。地球の問題として、「開発」については考えなくてはいけない。「国際先住者年」を迎えるにあたり今まで以上に地域の人々との結びつきを理解していく必要性を感じている。

※1 沖縄教育文化資料センター 沖縄県那覇市古島119-1 TEL 0998-84-4555
出版物以外にビデオも販売している。学校における平和教育の指導案集がでてくる。各教科、特別活動、学校外地域活動

など積極的な取り組みがなされている。

※2 『米軍と農民—沖縄県伊江島』1973年 岩波新書 米軍を相手取っての平和活動についての記録が綴られてある。

『命こそ宝—沖縄反戦の心』 岩波新書 1992年

※3 「アイヌ文化資料館」 北海道沙流郡平取街二風谷 TEL 01457-2-3388

萱野氏が蒐集した貴重なアイヌの民具などがある。隣地に「二風谷子ども図書館」がある。アイヌ語の教室もある。

<参考文献>

『観光コースでない沖縄』 1983年 高文研

『どこへ行く、基地・沖縄』 1989年 高文研

『現代社会資料集 沖縄県版』1985年 沖縄時事出版 沖縄県高等学校社会科学教育研究会
『法律時報 復帰後の沖縄白書』1975年 日本評論社

『リゾート列島』 1990年 岩波新書 佐藤 誠

『そして我が祖国・日本』 1983年 朝日文化 本多勝一 ほか

3. あるアイヌの主張

私は沙流郡平取町二風谷に生まれ育ったアイヌです。私はアイヌ民族ですが日本の国籍を有しており、日常使用している言語は、日本語であります。したがって風俗・習慣とも日本風の中で育ったといえます。多分、考え方も一般的な日本人とそれほど変わりがないと思います。しかし私がアイヌであることは事実であります。

ある行為が自分の精神をささえている文化によってよいこととされたり、悪いこととされたりする例を上げてみましょう。

まず、私の父、萱野茂の経験談です。父は昭和20年に沙流川で流送人夫をしておりました。山から切りだした丸太を日高町から雷川まで川の流れを利用し運ぶわけです。この流送人夫には、アイヌの人夫とシサム（和人）の人夫がおりました。アイヌの人夫は流れている川へは、絶対オシッコをしません。ところが本州からきた人夫（シサム）は、川へジョーと小便をたれたそうです。その光景を見た父は、なんだか嫌だなあと思ったそうです。父は小さいころから大人たちに承は大事にしなければいけないと教えられていたわけでした。たとえば、水汲み場をいつも綺麗にしなければいけないとか、川には絶対にオ

シッコをしてはいけないとかなどと。したがってアイヌにとっても川にむかって小便をすること自体考えられないことなのであります。すなわちアイヌ文化を基礎にして育った人にとって、川にむかって小便をしている光景を見ることが、耐えられないことだろうと思います。

また4～5年前朝日新聞にこのような記事が載っていました。中国残留孤児が日本に戻ってきて生活をはじめました。ある日、日本人の友達を家へ招待し中国料理をご馳走しました。大きな盛り皿からお客さんのお皿に奥さんが料理をよそする時、箸に付いている料理をとり除くために自分の箸をなめてからよそったそうです。すると露骨に嫌な顔をされたというものです。自分の箸をなめてからよそるのが礼儀なのに嫌な顔をされたことに対して納得できないという内容でした。中国残留孤児は、民族的には日本人、大和民族であります。しかし中国で育っているため風俗・習慣は中国人とまったく同じであります。中国においては、普通の行為が日本においては嫌われることもあるわけでありませう。

私は9年ほど前にタイ国にいったことがあります。タイ国は仏教国であり、男は一生の

うち1回は仏門に入り僧として修業しなければならぬことになっております。我々は必ず現地ガイドさんに「かわいい赤ちゃんや幼児をみても、絶対に頭をなでないでください」と注意を受けます。タイ人は、人間の頭には魂が宿っており神聖なものであると信じております。したがって他人の頭に手を触れることを忌み嫌うわけですね。日本では赤ちゃんの頭をなでることは、一種の愛情表現ですが、ところが愛われれば一転してタブー（禁忌）とされております。

なぜ、このような違いが生ずるかということ、それは文化の違いによるものだと思います。文化という言葉を広辞苑で引くと「人間が学習によって社会から習得した生活の仕方の総称。衣食住を初め技術・学問・芸術・道徳・宗教など豊のこころより面にわたる生活形成の様式と内容とを含む」と記されております。すなわち私の父、萱野茂はアイヌの精神文化を受け継いでいるため、川にむかってオシッコをしている様子を見ると、嫌な感じを受けたといえます。このように文化の違いによって、ある行為に対する受け止め方が異なった文化、すなわちアイヌ文化が存在することとは明白であります。

まず日本および日本政府は、アイヌ文化の存在の事実を認めなければいけないと思えます。ただ存在を認めるだけでなく、次にその文化を尊重しなければなりません。日本人は、アイヌ文化に対してあまりにも無知であり、無関心であります。そこで私は、小学校、中学校、高等学校の科目に「アイヌ文化」あるいは「アイヌ科」というものの設置を求めるものであります。さらに大学においても「アイヌ文化」・「アイヌ語」という科目を設けて戴きたい。これらのことは、文部行政によって即、実行することができます。こうすることにより、日本において教育を受けたものは異なる文化、あるいは異なった考えを有する他の人たちの存在を素直に認め、それらを受け入れることのできる度量の大きな人間になるものを確信しております。現在の文部省の教育方針は、画一的かつ同質的な考え方もつものを育てようとしているように思えます。結果的には、大企業に入社して金儲けが上手にできる人間を作っているような気がします。また、「アイヌに関する情報を流さず」日本人・日本国民がアイヌ問題について関心をもちたいようにしむけている向きがあります。日本には、アイヌおよびアイヌ文化が存



菅野 茂さん

在するという事実は事実として国民に知らしめ、そのうえで国民の世論を問うべき時期にきていると思えます。もしこのような教育をすることができれば、日本は素晴らしい社会となるでしょう。たとえば現在、社会問題と化している学校のいじめが激減するではありません。外国人に対する閉鎖制が緩和されるではありません。ひいては、お年寄りや体の不自由な人たちに対する自然な思いやりなどが育まれるものと思えます。そして現代の日本社会が容認しているところの「物質優先主義」あるいは「お金第一主義」という考え方が誤っていることに気付くであります。こうすることにより、精神的にも物質的にも豊かな国づくりが可能となるのであります。このような国をつくるためには、まず日本の先住民族である「アイヌの存在」を認めかつ「アイヌ文化」を尊重する政策を早急に執る必要があると思えます。文化は世界共有の宝なのですから。

(注) 日高町・・・北海道沙流郡日高町
富川・・・北海道沙流郡門別町富川

4. “北緯45°最先端は最北端”

北緯45度、宗谷海峡の彼方、約40数*。先にサハリンを望める国境の街、稚内から右手に日本海に浮かぶ利尻富士を望みつつ、車で南下すること約40分、利尻礼文サロベツ国立公園、広大なサロベツ原野のど真ん中に着く。ここは豊富町サロベツ原生花園、自然観察用の木道から地平線を眺めて、その雄大さを公園利用者に味わって頂いている。原野は約2万坪、東京の山手線が内側に2つスッポリ入る広さがある。そして、高さは平均海拔数m以下、低地としては世界的に広大な貴重な高層湿原が広がっている。湿原で有名な尾瀬と大雪山とここにしかない希少種、食虫植物ナガバノモウセンゴケが自生している。

6月から7月にかけて一斉に湿原植物が開花。特にツルコケモモ、ヒシヤクナゲなどのつじ類の花が見事だ。最近、地元の自然のくわしい人からよく聞かれる言葉は「昔のサロベツ湿原の花の数や広がりにはこんなもんじゃなかったよ。」である。いま、可憐な花のかわりに笹がどんどん侵入してきている。湿原の水位が下がり乾いてきた証拠である。そこで環境庁では、笹を対応させ、湿原の植物の回復をはかるため笹を水攻めにするなどのミニ実験ダムを作ったり湿原保全事業を開始している。しかし、大規模な乾燥化を食い止める難しさを感じているのが正直なところだ

ある。乾燥化は昭和36年から北海道開発局がサロベツ原野の毎春の融雪時の洪水を防止するため、原野の中央部を長大な放水路を買通させた直轄排水事業が主な原因であるろうといわれている。同事業の直接の受益部層は戦後の混乱期に満州引揚者を中心に無計画に入殖したもののだが、洪水防止のめどがいついた時期、昭和40年頃には離農者が続出し、部層によってはほぼ50%の離農率に達した。それまでの農業経営がいかにも貧しく苦しいものであったかを物語る。それから20数年後の現在は離農もほとんどなく乳牛飼育中心の酪農家が雄大な自然のなかで営まれている。

いま、サロベツ原野の開拓の子孫たち、時代をになう子供達がどんな教育を受けているかぜひ紹介してみたい。

昭和22年山形県庄内地方からの開拓団によって開かれた庄内部落は昭和60年現在、戸数30戸弱。庄内山中校は利尻富士を彼方に望める雄大なサロベツ原野にある。まさに地域のたたちによって創られ支えられてきた学校であり父母や地域と一体となった学校がすすめられてきた。自主・自立の力を育てる中で”決まりのない学校”をつくろうと全職員が努力し続けているのが庄内山中学校である。以下、平成22年2月末最新刊の「子育て

教育を宗谷に学ぶ」坂本光男著、大月書店刊より引用しつつ紹介したい。昭和57年、中学校廃校の計画が出されたとき教育行政と鋭く対立し中学校を守りきった誇るべき歴史を持っている。現在、全校生徒数約500名。庄内校の3つの宝は読書活動、全校合唱、創作活動である。読書活動は見事に授業に反映し、すべての子の語らいが豊富であり、発表や表現に、豊かさを感ぜさせる。作文力の水準も、とても高いのに驚かされます。体験学習を特に重視し、花壇づくり、自然の森づくり、小動物の飼育、農場栽培などが年間を通して取り組まれている。創作活動は非常にハイレベルで陶芸、木工芸、機織芸など多彩である。もっとも重要なのは12名の先生たちが2週間に1度行なう、校内研修会である。楽しくわかりやすい授業づくりや居心地のいい学校、学校づくりは、このためまなない徹底した深い討論が指導力の源泉のようである。この学校には制服はもろろんないし校則らしい決まりもない。自主・自立という今の我が国の教育ではもっとも与えることが難しいものが、ここでは自然体の心やさしい教師集団が美事に生み出している。

庄内の中学生が主に進む道立豊富高校を紹介しよう。いつも、同校を訪れるとすれ違ふ生徒たちから気持ちのよい明るいあいさつに

包まれ、幸せな気分になる。直接、話をしてみると、話の中身の質は高く、心はまだ小学生のような素直さを感じてしまった。その生徒は郷土の民話をお年寄りから聞き取り、絵本や紙芝居づくりの活動では全道屈指の郷土研究部の女生徒だった。豊富町内の中学卒業生の成績上位者は稚内市内の高校にはほとんど進学する。豊富高校の7～8年前は、生徒の荒れた学校として有名なほどだった。その同じ高校が平成元年度の北海道教育実践校として全道287高校の中の一つだった2校のなかに選ばれ、長年の教職員が一致協力して勤労体験学習や奉仕活動に取り組みが表彰された。同校の特色は常に身近な郷土学習を中心に置いていることである。生徒が生まれ育った地域の自然や産業を実際に見学させ肌に触れることにより地域の抱えている実情に目を向けさせ、地域の将来像を考え巡検学習が年2回実施されている。「現代社会」「理科I」の合同企画である。巡検の主なテーマはサロベツ原野の開拓、国立公園、豊富の農業など多彩である。この3月3日、1年生全員67人による「社会自由研究発表会」のテーマは「農業を考える」で「酪農と自由化」「農家のお嫁さん対策」「ゴルフ場と農薬」などがある。「自由化」については米国などの省力化された低コストの農牧畜産物とは同次元で

の競争は無理との前提に立ち肉牛飼育では一頭一頭で良質の牛肉を生産すれば道は開けると強調。酪農経営の安定にとって町内でも深刻化している「花嫁対策」について女生徒たちは、道外から嫁入りした人たちからの聞き取りをもとに酪農家の仕事の厳しさがいたづらに強調されているくらいがある。家族そろって働ける点に酪農の魅力を感じ、地元町内の若い女性はもっと酪農に目をむけ、理解を深めるべきだと明るい積極的な結論を出している。町内でも来年中に完成するゴルフ場をめぐる問題については「農薬は使用しなくても炭素剤や肥料などで土壌を改良すれば応用できる」と断言した。いずれの研究発表も大豊生産、機械化、コスト第一主義の農業が見失っている「生産者と消費者の心の通いあい」を取り戻すべきだとしている。今、全国の高校の中退者は年間12万人、3県分の全高校が消滅するのと同じという。少し学校で問題を起せば日付抜きの退学届が強制される高校が多い。教育を忘れ大多数の高校教師の目にこの豊富高校の実践の成果はなんと映るだろうか。

言葉だけの、国際化が踊り、個性化という成績分け、能力分けの教育が推進される。豊富高校の教育は真の郷土教育から郷土人を育て上げていく。郷土を知り、地域を知り、そ

して日本を、外国を知り、地球を知る。知ることは愛することである。幸せな豊富高校生たち！最北端は最先端が宗谷教育界の合い言葉のようだ。3年前にできた稚内北星短大は木村学長以下、童話作家の加藤多一教授をはじめ、学生と四つに組んだ生き生き大学だ。宗谷には小学校から短大まで先生も生徒も学び会い、育ちあいの生き生き学校ばかりである。自由なのびのびした雰囲気のおかげで、自主的な力をつけている。ニューヨークに住む創造力育成のユニークな教育法で知られるスーザン・ストライカーは著書「さわってごらん」の中で「素晴らしい才能に恵まれた子供というのは実は素晴らしい子育ての才能を持った親に恵まれた普通の子供なのだと思いません。」と語っている。親を教師に置き換えることもできる。今、老人や子供や障害者などが安心して生きてゆけない国、安心して子供を学校に預けられない国、今発癌性など輸入食品などで安心して食物をとれない国、日本の自然を食いつくし、世界へも不動産を求め投資魔王の国、日本、そんな国を変えようと自らの頭で考え、自らの自主的な判断力をつける教育こそが変革の力となるだろう。日本のうるわしの大自然がコンクリート列島になる前に真の自主性を育てる教育改革が間に合っしてほしい。

5. 二風谷に生きづくユカラ

「これは歌なのかしら？何語を使っているのだらう？」もしも、生徒たちにユカラについて伏せて、まず、テープだけでその語りを聞かせたしたら、こう思う子も少なくないかも知れません。ユカラ(ユーカーラ)の本領は歌かと聞きまがうばかりの朗々と流れる美しさにあることを、北海道・二風谷の萱野茂さんの語りをうかがいがいながら強く感じました。ユカラは世界の三大叙事詩の一つとも言われているそうであり、アイヌの人々の間で、脈々と語られ、耳で聞くものとして伝わってきたものです。しかし、今のわたしたちがユカラに接することができるのは、印刷された文字を読む場合がほとんどであり、耳で聞く機会はめったにありません。学校の国語の授業でも、文字を目でとらえ、読み理解するということにあまり慣れずぎているわたしたちに、耳で体験するユカラは新鮮な感動をもたらしてくれるように思います。歌であるとか詩であるとかに分類することを超えて、歌も語りも混然となって言葉が語り伝えられるのも、言葉の息づく一つの形なのだと思います。高橋生ともなれば、和歌の歴史を習ったりなどしながら古代の歌謡のもつ意味や粹

田阿礼の古事記伝承について知識としては知っているでしょう。しかし、語り伝えられてきたものの本質に自分の体験として触れる機会はそう多くはありません。ユカラの流れの美しさを聞けば、この流れを聞いて育っていったであろうということにも自然に思い至るでしょう。また、カムイユカラにあらわれるサケへと言う繰り返しのリズムを聞けば、口で伝承するということは、頭を使って覚えこむというような堅苦しいものではなく、語りやすくなるための楽しい工夫が随所に散りばめられているというところも自然に感じられるのではないのでしょうか。それぞれの民族が使っている言葉を記す文字があった、なかったという以前に、口と耳を使って語り伝えること自体楽しいことであつたという現代の私達が忘れがちな言葉の一面をユカラは思いださせてくれるようです。人間と言葉の歴史のなかで、記す文字に重きをおいていた民族もあれば、口承を守っていた民族もいる。言葉の生きづく形にはさまざまなものがある間い言うことに気づくきっかけをユカラは秘めているように思います。をして、それはまたことばや文学、音楽の本質にも通じる一つの道であると思います。

ユカラを基礎知識なしに聞いて、これが日本の中で使われている言葉だと思に至る生徒は何人いるでしょうか。また、例え日本のなかなかの言葉であるところとヒントを与えてもアイヌ語を思いおこせる人数もそう多くはないかも知れません。なぜ、わたしたちが日本に居ながらアイヌ語についてこんなにも知らずにきたかということを見つめていくことによつて、言葉の歴史を通してさまざまなものが見えてくるように思います。

萱野茂さんが書かれた幾冊かの本を読むと、萱野さんのおばあさんの世代でもアイヌ語だけで充分暮らしていたことがわかります。ついで、何十年か前まではアイヌ語を使つて充分に充実した世界が成り立っていたわけですが、そして、いまは二風谷でも萱野さんたちがアイヌ語塾を設けるなどして、アイヌ語を守るためにたいへんな努力をされているわけですが、アイヌ語という世界にかけがえのない一つの言語をとりまく環境がこのわずか何十年かの間に大変変わってゆくと、言葉の世界からもうことを追ってゆくと、言葉の世界からもう本とアイヌの関係が見えてくるのではないかと思えます。アイヌ語の世界が日本語によって変容させられていった歴史を追うと、言葉

に変化があったということが見えてくると思
います。だから、私達の身近にあることばに
ついてもふりかえり、アイヌ語が変化してい
ったこの何十年間の間に日本から消えようと
している言葉はアイヌ語だけなのかというこ
とを考えていくと、共通語と方言の問題にも
たどりつくでしょう。また、共通語とそれ
他の言語や公用語に象徴されているものやな
ぜそれぞれが広まっていったかを見れば、アイ
ヌ語を守ろうとする動き・方言を大切に思
う心・民族語の問題にも結びつくものです。共
通語や公用語に象徴されているものやなぜ
れらが広まっていったかを見れば、アイヌ語
を守ろうとする運動がなぜ生じるかというこ
とも自然に理解できるのではないでしょう

か。
人がなぜそんなにも自分たちの言葉を守
ろうとするかということを考えるときにも、ユ
カラすぐれた示唆を与えてくれるように思
います。カムイユカラには自然のなかの動植物
に宿る神も多く登場します。例えば「鼻の神
の自ら歌った謡・銀のしずく降る降るまわり
に」(岩波文庫「アイヌ神謡集」)などを読
むとアイヌの人達がいかに自然を身近に感じ、
自然が人を守りはぐくんでくれるものだと考
えてきたかが伝わってくるような気がしま



絵 北島新平 本多勝一著「そして我が祖国・日本」 朝日文庫より転載

このようユカラにちいさいころからなれ親
しんでくれれば、自然を慈しみ、自然に親しみ
感謝する心がおのずと培われていったらう、
ということが想像できるような気がします。
今の私達とは随分違った、スケールの大きな
自然観をアイヌの人達はもっていたんだとい
うことをユカラの一遍でも示してくれるので

す。ユカラはアイヌの人々の間を生きぬいて
きた財産であるからこそ、言葉の示すものは
深く、言葉の生きづく形にな様なものがあ
るといふことや、その言葉を大切にしたいと
思うアイヌの人達の気持ち私達にも感じと
らせてくれる力があるのだらうと、二風谷で
ユカラを聞きながら思いました。

6. 豊かな自然、豊かな心

自然農法家として知られている福岡正信さんが、著書「わら1本の革命」の中で、教育について語っている。自然農法とは、福岡さんの「無こそすべてだ」という悟りを、農業の中で実践したもので、何もしい農法をめざしている。もちろんここで言っている自然は、放任とはまったく違う。自然型とは何かを熟知していないとできないものである。余談だが、砂漠を縁にとという運動にも、福岡さんの考えが応用され、成果が出ているということだ。ぜひ一読をお薦めしたい。その考えを教育にあてはめるとどうなるか。

「教育というのは、価値のあることだと思っている。ところが、それはその前に、教育に価値があるような条件を人間が作っているんだということにまず問題がある。」

「子供の耳は、ちゃんと音楽をキャッチしている。川のせせらぎを聞いていても、水車のまわっている音を聞いても、森のそよぎの音を聞いたって、それが音楽なんです。本当の音楽なんです。ところがいろいろんな雑音を入れておいて、耳に混乱させておいて、つまり、まがった道に子供を導いて、子供の純なる音感を墮落させてしまう。これでは、不自然な状態、いわゆる放任状態になってしまう。も

う小鳥の声を聞いても、風の音を聞いても、それが歌にならないような頭になってしまう。そんな頭にしておるから、今度は一生懸命で音階とか音符とかを教えて、歌がうたえらるようちに、音楽が聞けるように教育しなければならなくなる。人間の心のなかに音楽があるということが先決であるのに、その心を失わせないように育てていくという音楽教育はしなくて、それを不自然な環境のなかでくもらせて、やれ歌がうたえない、音痴だ、といって子供のしりをたたたく。」

とまあ、こんな具合である。私自信、小学校前は歌うのが大好きだったのに、小学校に入ってから「お宅のお子さんは音痴ですね」といわれて、ピアノを習いはじめたという経緯があるだけに、大変納得してしまっただ。

では、私が教えている生物ではどうであろう。すべての子供は自然のなかにすーっと溶けこんでいく事ができる。いつまでも、いつまでも自然のなかで遊んでいる。ところが理科の勉強では、違いがわからなくてはならないという。理由を説明できなくてはならないという強迫観念のもとに、自由な心は萎縮してしまい、教科書に出てくる知識をつめこんでいく事になるのではないだろうか。どうしたらよ

いだろう。まず教師が純なる心を取り戻したい。知識で武装してはいけない。自分がくらししている地域の自然を発見しよう。

北海道に旅行したときは、実にうらやましい限りであった。植物が動物が、そして大地が生き生きと語っている。泥炭層・アンモナイト・恐竜の骨・日高山脈の形成。地球もまた一つの生命であることを感じた。そこで暮らす人も、実に魅力的な人たちばかりであった。千の知識よりも、たった一つでも出会い、友達と知り合うように親しくなっていけたら、どんなに豊かなことだろう。その豊かさが、地球環境の危機を克服していく、意志の力となると思う。